

狂言(鞍馬参) 小考

田口和夫

—『古狂言後素帖』・『謡狂言図』の絵

描かれている狂言の演出が江戸初期に遡ると推定される古狂言絵については、この十二月往来でも私が(一人袴)・栗田口(327・338)、小林健二氏が(早漆)(345)を取り上げて考察し、古態であることを証している。ここでは(つしま祭)『古狂言後素帖』と称されている絵が、実は(鞍馬参)であったことをはじめに述べる。

掲出した右の絵は、西野春雄氏「新出資料『古狂言後素帖』について」(『国立能楽堂調査研究』6)で紹介された『古狂言後素帖』(江島弘志氏蔵の「夏十六図」で、裏に「つしま祭り」とある。左に掲出した略図は藤岡道子氏が「狂言古図の曲名不明曲の考察」(京都聖母女学院短大『研究紀要』42、楽劇学会平25大会でも)で紹介された『謡狂言図』(江島氏蔵)で、「ツシママツリ」とある。両者は同構図で、同じ名付けをされている。一般に知られる(対馬祭)(狂言記拾遺)は狂言(千鳥)の別名だが、(千鳥)の中にはこの構図に当たる場



『古狂言後素帖』



『謡狂言図』

面は無く、西野・藤岡両氏とも、内容不明の曲と結論付けている。藤岡氏は楽劇学会の発表資料で、この二つを並べ、「参詣で通夜をする大名といたずら者のような下男が後ろで何かをしようとしている、らしい図」とされるが「内容は不明」のままである。現行狂言でそのような場面を持つ可能性があるのは(鞍馬参)である。そう思って絵を見ると、太郎冠者は両拳を握っていて、顔をそむけ、口を開いている。主人の眠りを妨げようとしたはずら(ここでは肩を叩くのであろう)を仕掛け、横を向いて忍び笑いをしている場面と言えよう。こう考えていたところ、藤岡氏「狂言の絵画資料の考察—国立能楽堂収蔵品を中心に」(『国立能楽堂調査研究』7)にロンドン大学 SOAS LIBRARY 所蔵の(鞍馬参)の絵が紹介されていた。眠る主人の向かい側から太郎冠者が扇で床を叩いて起こそうとしている場面である。これは現在の演出と同じである。『後素帖』と構図はやや違うが、鞍馬参籠で主人を無理に起こそうという場面としては近似するものである。これを援用すれば、『後素帖』の「つしままつり」は「くらままつり」の「くら」を「つし」、「い」を「つ」と認識しての誤写であったと結論付けられよう。

天正狂言本と近世諸本

古型である天正狂言本の(くらま参)を段落

に分け、校訂本文を引く。

1 大名出て人を呼び出す。鞍馬へ参るとして太刀預くる。

2 道にて、鐙のはなにかかる白波。鞍馬より落ちて流るるちから川。

3 さて参り着きて通夜する。太郎冠者、再々供に歩く、億劫がりて、つぶてを御福と言うて騙す。

4 主目覚めて、御福おこせと云ふ。問答。

5 呪文にて渡す。鞍馬の大悲多聞天の御福を、主殿に参らせたりやく。たばつたりやく。く。く。く。

6 つぶてと云うて出す。太刀抜きて追う。留め。

近世初期の台本である虎明本・天理本では、天正狂言本の①鞍馬参詣の途次、大名と太郎冠者が連歌をすること、②太郎冠者が礫を御福と言つて主を騙すことの二点が失われ、祝言的な留めになつてゐることが大きく異なる。

天正本は太郎冠者の不奉公を主題としてゐるために、御福は礫なのだが、「福渡し」の呪文は近世以降と変わらず存在している。虎明本のように、主をなぶるために「福渡し」を行うと解釈できるものも近世以降にあるが、本来は言霊信仰というべきものであった。諸注が引く「八幡宮寺巡拝記」の、二人連れで参拝した一人が三つなりの橘を授かり、もう一人

が詞だけでも下さいと頼んで、詞と所作で受け渡したところ、受け取つた男は榮え、授かつた男は験が無かつた、という説話の通り、「福渡し」は信じられる作法だつた筈である。天正本も真面目に福渡しをし、冠者が「礫と言つたときに、その言霊効果は失せたと解し得る。

なお、この説話の基本型は夢買長者型昔話であつて、宇治拾遺物語「夢買ふ人の事」なども類話である。夢を買う又は取るることによつて致富・出世するのである。《鞍馬参》も福渡しをする以上、御福は移転した筈なのである。天正本はそのレベルから脱信仰へ大きく踏み出してしまつた形であり、近世諸台本は、それを本来のあり方に引き戻したのだと言えよう。

### 連歌の行方

天正本では参詣の途次、主従が連歌をする。所謂「福神狂言」では、連歌を詠むことによつて福神が影向するというのが基本型と認められるのだが、《鞍馬参》ではせつかく連歌をしたのに、後に展開しないのである。これは異例の事と言えよう。この異例を解消して発展させたのが、《毘沙門連歌》であると考える。これは橋本朝生氏が「連歌系福神狂言」として論じられた中で、後発の作例として挙げられた曲である。近世以降の諸台本に見えるのだ

が、実は《鞍馬参》とよく似た筋立てを持つてゐる。天理本はことに近く、初寅に二人が連れだつて参詣し、通夜をし、一人が授かり(後はまったく《鞍馬参》と同じ)争い、連歌をすると毘沙門が影向し、ありの実を半分に分けて与え、二人に宝を与えて、留めとなる。《鞍馬参》の主従を同格の二人に替へれば、争いまでの前半はそのまま成立する。連歌が福神出現の契機となつてゐる点も、無理がない。天正本で機能しなかつた連歌が、位置を変えることによつて、本来の機能を取り戻し、祝言の留めに繋がつたのである。一方、《鞍馬参》自身も、太郎冠者の反抗を裏に隠し、冠者はいたずら者として活躍するけれども、曲全体としては福渡しを持つ祝言へと変貌するのである。

近世中期には、鷲保教本に「鞍馬参ハ脇狂言ナル故祝言ノ習有」と言うような方向が確立し、「主ノ方ハ言葉業共ニ合手ヲウケテスル故、功者ノ役ナリ、太郎冠者ハ仕方思様ニ者ノ老人杯ハ仕所有故、主ノ方仕手ニスル口伝」と言うような狂言と意識されるようになって、現在に続くのである。

国立能楽堂二〇一七年一月定例公演に野村萬師が《鞍馬参》を演じられたが、そのために萬師とともに台本検討を行った、これはその成果の一部である。(文教大学名誉教授)